

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

慶應義塾大学一般・消化器外科での国内研修を終えて

和歌山県立医科大学外科学第2講座

北谷 純也

この度、日本臨床外科学会国内外科研修制度により、令和3年10月18日から29日までの2週間、慶應義塾大学一般・消化器外科で研修をさせていただきました。コロナ禍にも関わらず、貴重な機会を与えていただきました慶應義塾大学一般・消化器外科の北川雄光教授に厚く御礼申し上げます。また、高難度な食道癌手術を見せていただきました川久保博文准教授、様々な教室の取り組みを御教示いただきました松田論先生に、この紙面をお借りして感謝申し上げます。

私は、2008年に和歌山県立医科大学を卒業し、初期研修を終え外科学第2講座に入局しましたが、消化器外科医を目指した理由は、研修医時代にみた食道癌手術に憧れを抱いたからです。その頃は、手術時間も今ほど短くありませんでしたが、朝から晩までチーム一丸となり、患者のために全力で手術に取り組むことの素晴らしさを感じたからです。以後、上部消化管チームで、食道癌、胃癌治療を中心に診療、研究に携わってきました。その中で、上部消化器癌領域における慶應義塾大学一般・消化器外科の存在は非常に大きなもので、研究業績はもちろんのこと、JCOG食道グループを牽引している施設であり、手術をはじめ臨床研究や基礎研究についても勉強させていただきたく見学の希望をし、教室の山上裕機教授に推薦いただきました。

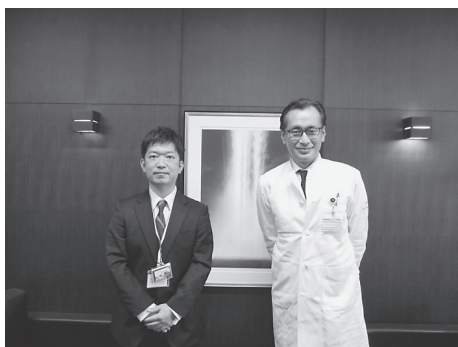
研修を通して感じたのは、まず、多くの臨床研究や基礎研究を着実に進めていくための専門家が教室の中に充足されている点です。慶應病院は、臨床研究中核病院ではありますが、CRCの方やJCOGの臨床試験を管理している先生、研究室の補助研究員などMD以外の人材が有効に機能している点は、見習うべき教室のあり方と感じました。毎年15-20人の入局者が居るも羨ましく思いましたが、教室が大所帯でありながら、非常に効率よくカンファレンスが行われている点にも驚きました。コロナ禍であり、web上でのカンファレンスが中心でしたが、内科・放射線科合同カンファレンス、手術症例検討や合併症報告を行う全体カンファレンスなど、朝から密に且つ効率的に行われていると感銘を受けました。

また、2週間という短い期間ではありましたが、非常に勉強になる食道癌症例の手術を見学させていただきました。いずれも川久保先生が御執刀の症例で、慶應オリジナルのハイブリッド体位による食道癌サルベージ症例のVATS、食道胃接合部癌に対する胸腔アプローチ→腹腔鏡下噴門側胃切除術、観音開き法での再建症例、ロボット支援下食道癌手術など食道外科医としての修練には、今後必須と考えられる症例をみせていただきました。当科では胸部食道癌に対しては、腹臥位での胸腔鏡下食道亜全摘術を基本としており、また、食道胃接合部癌に対しては、double tract再建を基本として、高位の場合は胸腔内胃管再建を行っています。慶應と和歌山医大では異なる方法ではありますが、それぞれの方法の長所、短所も経験できるのが、他施設を見学することの大きな意義であると思いました。

慶應義塾大学一般・消化器外科では、通常内視鏡や内視鏡治療も行われていると伺い、私たちも同様であるのですが、内視鏡治療まで行っているのは、珍しいのではないのでしょうか。内視鏡は、内視鏡医がとの風潮はありますが、消化器外科医として、術前の切離ラインを決めるマーキングや術中の内視鏡、手術した患者さんの術後フォローの内視鏡など外科医であっても内視鏡手技は必要であり、外科手術へのフィードバックに重要な要素です。今後も外科医が内視鏡専門医を取得出来る環境の維持が必要ではないかと感じました。

さらに、今回の研修を通し非常にありがたい出会いがありました。助教の松田諭先生です。松田先生は、2008年卒の同期であります。日本消化器外科学会 Under40委員会の委員長やJCOG食道癌グループの若手の会代表などを務めており、研究業績はもちろんのこと、食道外科における同世代のリーダーの先生です。研修期間中にそれぞれの教室の取り組みや手術について討論出来たのも非常に勉強になりました。後輩の手術指導や研究指導の様子を見せていただき、また、海外の食道外科医とのカンファレンスなど有意義な経験もさせていただきました。

この慶應義塾大学一般・消化器外科での国内外科研修は、本当に実りのあるものになりました。今後、この研修で経験したことを日々の診療、研究に生かせるように精進せねばならないと考えております。最後に、この貴重な研修の機会を与えていただきました日本臨床外科学会万代恭嗣会長、委員長の高山忠利教授はじめ委員の先生に重ねて御礼申し上げます。日本臨床外科学会による国内外科研修のプログラムの機会が後輩達に受け継がれて行くことを願っております。



北川雄光教授と



川久保先生はじめ上部班の先生と